**集中講義に参加して**

福山市立動物園　管理員　秋田風（旧姓：佐藤）

1. 講義の内容

今回の講義では、「動物園での学び－私が動物園飼育員として考えたこと－」を主題とし、２つの視点から話した。1つは、動物園飼育員として動物園を訪れる人たちにどのような学びを提供できるかという視点である。もう1つが、動物園飼育員というキャリアのなかで私がどのような発見や学びを得られたかという視点である。

まず、1つめの視点から動物園での学びについて話した。かつて動物園は訪れる多くの人にとって娯楽のための施設であったが、現代の動物園は娯楽施設にとどまらず教育にも力を入れている。現在、日本各地の動物園では様々な教育活動が展開されており、学校と連携しておこなうものも少なくない。このたびの講義が「総合的な学習・探究の時間」教育・指導法に関するものであったことから、動物園と学校が連携して展開する特色ある教育活動の実例をいくつか紹介し、動物園における多様な学びの可能性についての私見を述べた。動物園での学びというと、動物園がさまざまな姿かたちをした動物を観察して動物の暮らしぶりの多様さを知れる場であることから、生物多様性に関する内容に限局されると思われがちである。それは動物園における学びの表層であり、動物園を訪れた人たちが学び得る内容そのものにも多様性があると私は考えている。そうした多様性のある学びは、動物園を訪れた一人ひとりが自分の気づきを内省と対話によって深める過程によってもたらされる。動物園を訪れた人を主体的な学習に向かわせ多様な学びを展開させていく難しさと面白さについて、私自身の経験をもとに話した。

次いで、もう1つの視点からは、現代的な課題であるキャリア形成や社会参画に関する話題を中心に話した。たとえば、かつては男性が多かったといわれる動物園飼育員だが、現在では女性の比率も高まっている。動物園飼育員を目指す女子学生への情報提供をおこなうインターネットサイトには、コミュニケーション能力が高くチームで働くことに適しており、マルチタスクにも向き、動物に対する細やかな観察やケアをおこなう能力があるという点において、動物園飼育員は女性に適した職業であると書いてある。その一方で、女性飼育員は体力や筋力面では男性に劣るため不利であるとも書かれている。こうしたジェンダーバイアスは、動物園飼育員という職業に限ったものではない。私は、自身の仕事ぶりや職場での経験から、ここに書かれたことは性差よりも個人差によるところが大きいと感じている。だからこそ、職業選択や職業適性を「女性だから」「男性だから」という属性で考えるのではなく、それぞれの職場で個人の特性が活かされたり配慮されたりする環境を整えていくことが理想であると話した。このほかに、（いま私は育児休業中であることから）育休取得者として制度について思うこと、妊娠・出産・子育てのこと、夫婦の家事負担の割合などについて、自分の体験を軸にさまざまな話題について学生たちと対話した。くわえて、学生からの質問に答えるかたちで、私が就職して感じたジェネレーションギャップや、私が今後のキャリアをどう考えているかについても話した。

1. 「総合的な学習の時間」に関する私見

「総合的な学習の時間」は、2002年度の学習指導要領の改訂に伴って全国の公立学校で本格的に導入された。具体的には、小・中学校では2002年度より、高等学校では2003年度より正式に実施されている。変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしている。変化の著しいこれからの時代において、「総合的な学習の時間」が果たす役割はより一層重要である。

私は1986年度生まれだが、「総合的な学習の時間」を履修したのは中学2年・3年時の2年間だけだと記憶している。高等学校でも履修しているはずだが、残念ながらその記憶は全くない。私が中学2年生だった2000年頃は、2002年度からの新教育課程の実施を控え、各学校が「総合的な学習の時間」を試行している時期であった。当時、「総合的な学習の時間」において環境に関する課題はよく取り上げられており、私も環境に関する学習活動を体験した。学校周辺の割り当てられた区域のゴミ拾いをし、その区域のゴミの内容と量を調べ、結果をポスターにして発表するというものである。私は当時から環境への関心が高かったにも関わらず、例に挙げた学習活動では提示された課題について指示された手段と方法で調べた記憶しかなく、課題の設定や資料の収集・選定を主体的におこなったとは言い難い。さらに、調べた結果を「ここには、こういったゴミがありました」と発表するところで学習が終わっており、ゴミ拾いで得られた知識をもとに「区域によってゴミの内容や量に違いはあったか」「ゴミが多い区域には何らかの特徴があったか」「ゴミのポイ捨てを減らす方法にはどんなものがあるか」などの新たな探究課題を見つけ、それについてさらに調べるという学習活動に発展させることはしなかった。果たして、こうした学習活動で「総合的な学習の時間」がねらいとする学びに向かう力は育まれたのだろうか。

このたびの講義で学生たちが仕上げた8つの作品から、各々の興味・関心をもとに課題を設定し、どのように探究活動を展開したかを読みとることができた。8つの作品全てにおいて、実社会や実生活のなかから問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現することが、とてもよくできていた。課題の絞り込みや資料の分析について改善の余地がわずかにあるように思うが、学生たちが探究的な学習に主体的・協働的に取り組み、互いのよさを生かしながら積極的に社会に参画しようとする態度が見てとれたことを高く評価する。よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく力を学生たちに強く感じた作品集であった。こうした技能や資質は、一朝一夕に身につくものではないだろう。その素養が高等学校までの「総合的な学習の時間」で育まれたのだとすれば、「総合的な学習の時間」には一定の授業の効果があるものと推察できた。2022年度より、学習指導要領の改訂により、高等学校の「総合的な学習の時間」は「総合的な探究の時間」に変わる。課題を発見し解決に至るまでの能力や主体的に学ぶ態度を育むことは継続しつつ、教科学習との結びつきを強くし、実際の社会や生活で生きて働く知識・技能や人間性を身につけること目指すものになるという。この変更を受けて、動物園においてはどのように対応できるだろうか。「総合的な探究の時間」によってもたらされる新たな展望に期待するとともに、学校を取りまく地域社会もカリキュラムの変化への対応を検討する必要があると考えた。

1. 講義を終えての感想

このたびの講義では、私とは専攻の違う学生たちと対話する機会を得られ、非常に刺激的で学びの多い経験をすることができた。このような貴重な機会をくださった馬居先生をはじめとする皆さまに、まずは感謝申し上げたい。

個人的な話になるが、私と馬居先生のつながりは、数年前にある通信制大学で開講された先生の講義を私が受講したことから始まった。当時、その通信制大学の講義では、学生同士のディベートや講師へのリアルタイムの質問など講義中に学生が発言をおこなう方法は、受講生と講師のみが閲覧可能なチャット機能を使ったものしかなかった。そうした学習環境でも十分に学ぶことはできたが、チャットにはコメントの見落としやタイムラグが生じたり、発言の意図が正しく伝わらなかったりするなどの、ウィークポイントがあった。その経験があったために、zoomを利用した今回の講義では、対面とほぼ同等のディスカッションをおこなえたことに驚いた。さらに、zoomを活用することで、私は広島の自宅にいながら家事・育児の隙間時間に講義に参加できた。この数年でICTがさらに発展し実用性が向上していることを体感し、教育現場において学びの可能性が飛躍的な広がりを見せていることを知った。ICTによって、現代的な課題に直面し困難を抱える当事者とつながりやすい環境が整えられつつあることの意義は、児童・生徒・学生が現代的な課題を解決する方法を考えるうえで非常に大きいのではなかろうか。さまざまな情勢調査の統計情報を読み解くだけでは見えてこない個人の思いをすくいあげる経験は、子どもたちに自身も現代的な課題の当事者であるという意識づけを促すものだと私は思う。

現代的な課題の当事者意識といえば、私には苦い経験がある。私もかつて馬居先生の講義を受講したことは先に述べたが、今回の講義を受講した学生たちと同じように当時の私も自分が関心のある現代的な課題について調べ、その解決方法を提案するレポート作成をおこなった。私は「女性の社会参画を阻むのは何か」というテーマについて、能力主義や自己責任論を論拠に自論を展開し、女性の社会参画が進まない原因を本人の意欲に求めるという今にして思えば非常に乱暴な結論を出した。その結果、私の論考は馬居先生に真っ向から否定され、「考えが足りない」「優しくない」と指摘を受けた。いま私は出産によって一時的に仕事を離れているが、自身が経験することによってはじめて社会参画を望んでも自分の意志だけでは実現できない状況があることや、そうした状況にある女性が抱える葛藤について知った。こうした状況や葛藤のなかにある当事者の声に耳を傾けていれば、もしかしたら当時の私が導き出した答えはもう少し当事者に寄り添ったものだったかもしれない。少なくとも、レポートを書いた当時の私は、社会参画にあたって苦労や困難を抱える女性に対して偏見に満ちたステレオタイプを描き、彼女たちが直面する課題を俯瞰していただけで、私自身が当事者になり得るとは考えてもいなかった。こうした姿勢では、現代的な課題を解決することはできないだろう。

今回、学生たちと直接話したり、彼らの作品に目を通したりするなかで、私は学生たちに非常に柔軟で寛容な印象を抱いた。講義のなかで、私が「自己実現だけを見据えて職業選択をした先に、価値観を変える体験がいくつも重なりとまどっている」という話をしたところ、学生たちが「自分ならどうか」「自分のパートナーが同じ悩みを抱いていたらどうするか」といった視点で即座に返答してくれる場面があった。その反応は、とても自然で柔軟だった。そして、学生たちと対話を重ねるうちに、その柔軟さの根底に、だれかを自分のものさしでジャッジしない寛容さがあることに気づいた。だれかの価値観や生き方が自分とは異なるものであっても、それを否定し変えようとするのではなく、それに丸ごと飲み込まれてしまうわけでもなく、ありのままを受容して干渉しない学生たちの態度に私が学ぶことは大きかった。ゲスト講師という立場で学生たちに話しをさせてもらったが、私のほうがこれからの社会を生きていく勇気を学生たちから分けてもらい、育休から仕事復帰して再び社会で働ける日を少し楽しみに思えるようになった。

現代社会は、先行きが不透明で、将来の予測が困難な社会である。多様な人々が集い、これまで予測できなかったような新たな課題が次々に生じる社会にあって、柔軟さや寛容さはよりよく生きることを実現する力になるだろう。講義で同じ時間を共有した学生たちが、その力をもって社会に参画し、それぞれの居場所で活躍することを心から願っている。そして、集中講義で出会った学生たちを迎え入れた社会が、そこに生きる全ての人にとって寛容で、変化に柔軟な社会になることを、ともに新たな社会をつくっていく社会人の先輩として期待している。